



RYUKOKU
UNIVERSITY

You, Unlimited



広報誌「龍谷」

政策学部 川原 怜也さん

2023 VOLUME 95

Ryukokoku

Brand Story

世界は驚くべきスピードでその姿を変え、
将来の予測が難しい時代となっています。
いま必要なことは、「学び」を深めること。
「つながり」に目覚めること。
龍谷大学は「まごころある市民」を育てていきます。

自らを見つめ直し、他者への思いやりを発動する。
自分だけでなく他の誰かの安らぎのために行動する。
それが、私たちが大切にしている
「自省利他」であり、「まごころ」です。
その心があれば、激しい変化の中でも本質を見極め、
変革への一歩を踏み出すことができるはず。

探究心が沸き上がる喜びを原動力に、
より良い社会を構築するために。
新しい価値を創造するために。

私たちは、大学を「心」と「知」と「行動」の拠点として、
地球規模で広がる課題に立ち向かいます。
1639年の創立以来、貫いてきた進取の精神、
そして日々積み上げる学びをもとに、様々な人と手を携えながら、
誠実に地域や社会の発展に力を尽くしていきます。

豊かな多様性の中で、心と心がつながる。人と人が支え合う。
その先に、社会の新しい可能性が生まれていく。
龍谷大学が動く。未来が輝く。

You, Unlimited





広報誌「龍谷」

01

P01

Feature Article

巻頭特集 学長対談

「正しい」から「楽しい」リサイクル

株式会社JEPLAN

取締役 執行役員会長 龍谷大学学長

岩元 美智彦 × 入澤 崇

02

P06

Ryukoku News

心理学部、ついに開設

「中高大連携」のはじまりの場となる「黎明館」

2025年に完成 他

03

P10

People, Unlimited

食べる喜びと健康のために

「産官学連携」で高齢者向けレシピを開発

小田垣 萌衣 さん 農学部

前田 穂乃香 さん 農学部

P12

強豪関東勢を抑え、悲願の初優勝

対話で強くなったバドミントン部男子

川原 怜也 さん 政策学部

P14

自ら気づき明日の行動を変える

脱炭素社会に向けた提言を作成

松田 あゆみ さん 法学部

04

P16

Education, Unlimited

学生が自主的に挑み成長

「R-Gap」プロジェクトリサーチ

橋口 哲志 助教 先端理工学部

野口 佳樹 講師 先端理工学部

P20

大学は社会共生に何ができるのか

足を運び、ともに考えた先に見えるもの

高田 満彦 教授 社会学部

05

P24

Research, Unlimited

子どもの食物アレルギーが減少

新たな予防策の効果を示唆

楠 隆 教授 農学部

P28

人工知能がより身近に

画期的な半導体実装に成功

木村 睦 教授 先端理工学部

岩城 江津子 さん 理工学研究科

06

P32

Event Ryukoku Museum

親鸞聖人と聖徳太子の深い縁

六角堂の夢告が真宗を生んだ

石川 知彦 龍谷ミュージアム 副館長

07

P34

Connect, Unlimited

龍谷大学をつなぐ対談

「えん罪」のない世界へ

えん罪立証への無償支援を広げる

法学部

法学部

三須 愛子 さん × 古川原 明子 教授

08

P38

News & Topics

最新情報

09

P43

Book Café

新刊紹介

10

P44

My Campus

マイキャンパス

01

Feature Article 巻頭特集 学長対談

株式会社JEPLAN
取締役 執行役員会長 龍谷大学学長
岩元 美智彦 × 入澤 崇



People, Unlimited

Education, Unlimited

Research, Unlimited

Connect, Unlimited

News & Topics

「正しい」から「楽しい」リサイクル

様々なモノのリサイクルが進むなか、ゴミを資源に変えるという画期的なりサイクル技術を開発し、注目されている岩元美智彦会長。この技術を「これからの人類と地球を救う、コペルニクスの転回」と絶賛する入澤学長は岩元会長との対談を熱望していた。

入澤:私は岩元会長が実現された、役目を終えた服(対象:ポリエステル繊維)やペットボトルを半永久的にリサイクルする革新的な技術と、事業展開において人々を巻き込んでいく仕組みは、究極の循環型社会、持続可能な社会を実現するものだと感じました。

岩元:ありがとうございます。当社独自のリサイクル技術は「ケミカルリサイクル」と呼ばれるものです。現在の一般的なリサイクルは、例えばペットボトルなら粉碎・洗浄後に熱で溶かしてペットボトルに作り替える物理的リサイクルです。ただ、この物理的なりサイクルは利用ロスが多い、色や添加物が完全には除去できない、再生回数に限度があるといった課題があります。一方、私たちの化学的なりサイクルは、ペットボトルなどのリサイクルするものを分子レベルまで分解して添加物などの不純物を除去し、再構成して再び原材料を作ります。こうすれば、色がついていても劣化していても石油から作る原材料と遜色ない品質にまで戻せて、しかも何百回でも何千回でもリサイクルが可能です。

入澤:私は岩元会長がおっしゃる、この技術によって、不要だったゴミが新たな「地上資源」となり、石油をはじめとする「地下資源」を使わずにすむという点も素晴らしいと思います。というのは、ロシアによるウクライナ侵攻もそうですが、戦争や紛争の一因は、限り

ある地下資源の奪い合いです。しかし、地上資源で賄うことができれば、地下資源を奪い合う必要がなく、争いのない安穏とした世界、平和へと結びつきます。

岩元:環境、平和、さらに経済という要素が加われば、いっそうの好循環を創出できます。そのためには、まずケミカルリサイクルによる原材料を用いて服から服を、ペットボトルからペットボトルを繰り返し製造してくださるメーカーの賛同が不可欠です。ゴミを集めてリサイクルすれば終わりではなく、商品を作って販売することで利益を得る。その商品が魅力的で価値があるほど消費者に購入いただくことができメーカーは潤い、市場も経済も好転します。私たちは地上資源による経済圏の確立もめざし、メーカーとの提携を推進してきました。現在、日本のアパレルメーカーや世界的アウトドアブランドとも提携し、商品などに当社のケミカルリサイクルによる原材料を活用いただいています。

入澤:地上資源とケミカルリサイクル技術が環境・平和・経済と見事にリンクできることをさらにグローバルに発信していけば、循環型社会の実現に大きく近づくはずですよ。

岩元:加えて、私は完全循環型社会の取り組みは、当社のみならず、日本がリードすべき仕事だと考えています。

入澤:確かにそうです。日本は科学が発達する近代までは、着られなくなった着物を仕立て直すといった循環型の暮らしが日常化していました。岩元会長が推し進めるリサイクルは、日本文化の資質や知恵に合致し、取り組みを加速・深化させると思います。

岩元 美智彦

1964年鹿児島県生まれ。北九州市立大学卒業後、繊維商社に就職。営業マンとして勤務していた1995年、容器包装リサイクル法の制定を機に繊維リサイクルに深く携わる。2007年1月、現在の代表取締役社長である高尾正樹氏とともに日本環境設計（現JEPLAN）を設立。資源が循環する社会づくりをめざし、リサイクルの技術開発だけではなく、メーカーや小売店など多業種の企業とともにリサイクルの統一化に取り組む。2015年日本人としては5人目となるアショカ・フェローに選出。著書『「捨てない未来」はこのビジネスから生まれる』（ダイヤモンド社）。



入澤 崇

龍谷大学学長。1955年広島県因島生まれ。龍谷大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学。専門は仏教文化学。1990年文学部仏教学科に着任。ベゼクリク石窟壁画の復元事業や数多くの仏教遺跡調査に従事。2004年から5年間アフガニスタン仏教遺跡学術調査隊の隊長を務める。龍谷ミュージアム館長、文学部長を経て、2017年4月に学長就任。

岩元: 私たちが技術とともに注力してきたことが、不要になったものを回収するプラットフォームづくりです。リサイクルでは元となる原料を集めるための「回収」が必要になってきます。そこで、私たちは消費者の意識調査を実施し、不要になったものをどこに持って行くのが便利か質問したところ、多くの方が購入した店舗と回答されました。この結果を受けて、私たちは様々な店舗に依頼し、回収ボックスの設置を地道に進めてきました。現在服の回収拠点は、全国に約4,500拠点(2023年2月15日時点/スポット開催含む)にまで広がりました。

入澤: もう一つ、岩元会長の斬新な取り組みであり、話題となったのが有名なハリウッド映画に登場した車型タイムマシン「デロリアン」をゴミから再生した燃料で走行させたイベントですね。

岩元: 回収プラットフォームが完成したから「リサイクルに協力してください」と単に訴えても人びとの意識や行動の変容を図るのはなかなか困難です。そこで、リサイクルを自分事や習慣にする「正しい」よりも「楽しい」体験をすることが効果的なのではと考え「古着を持ってくるとデロリアンと写真が撮れます」と呼びかけました。すると、たくさんの方が集まり、撮影のために1時間以上も並んでくださったのです。しかもSNSでの拡散によってリサイクルは楽しいとの気づきが伝播し、多くの服を回収できたとともに喜びを感じました。今後は当社のケミカルリサイクルによる原材料が使われた衣服について、例えばオリンピック選手が着用していたウェアが含まれているといった、リサイクルの経緯がわかるようにしたいと思案しています。ファンの方や同じ競技に挑んでいる方はワクワクしますよね。

入澤: 「正しい」を「楽しい」に変える。「ドキドキ」や「ワクワク」を促す。こういった柔軟な発想は、リサイクルはもちろん社会課題解決において重要です。

岩元: 社会課題は真正面から捉えて考えることも大切ですが、上下左右あらゆる方向、角度から見てみると、今までに無かった解決の発想が生まれてくるのではないのでしょうか。

入澤: 本学では「仏教SDGs」を打ち出し、持続可能な社会の構築に向けて「龍谷大学カーボンニュートラル宣言」を発出。環境課題を解決する様々な取り組みをおこなっています。大学とともに学生たちがしなやかで新しいアクションを次々と起こしていることが私の誇りでもあり、あらゆるところで学生たちの活躍を話しています。

岩元: 私は幼少期から母に「地球に貢献する人が幸せになれる」と教えられてきました。しかし、その真意がわからないまま、学生時代を過ごしてしまったのですが、社会人となり、さらにケミカルリサイクル事業を推し進めるようになって、母の言葉の意味と重みを実感しました。一方、今の若い人たちと話をすると、環境に対する意識が高く、役に立ちたいとの思いがひしひしと伝わってきます。なので、龍谷大学の学生の皆さんとも是非連携していきたいです。若い人の発想は課題解決のスピードをアップさせるので、いろいろなアイデアを出していただきたいと思います。

入澤: 地下資源から地上資源への変換を通じて、平和で安定した社会を築くことは本学の理念と相通じています。連携のスタートを飾るイベントとして、龍谷大学でゴミ燃料を使ったデロリアンを走らせましょう。

心理学部、ついに開設 「中高大連携」のはじまりの場となる「黎明館」 2025年に完成

れいめいかん

社会と向き合い、人を支える心理学部

龍谷大学では、創立400周年を迎える2039年度末までを見据えた長期計画「龍谷大学基本構想400」に基づき、様々な取り組みを進めています。その一環として2023年4月に心理学部を新設。めまぐるしく変化する現代社会が抱える課題は複雑化、多様化し、先の見えない不安や閉塞感が蔓延するなか、心の危機に晒されている人は増えています。本学の心理学部は、人と人の繋がりを深く理解することで現代社会が抱える課題を解決に導き、より良い社会や未来のために貢献できる人材を育成することで社会の期待と要請に応えます。

他大学と一線を画するのは、独自の実践的なカリキュラム。2012年から文学部が有する臨床心理学科の教育実績をさらに高め、学生の思い描くキャリアや関心に合わせて心理学の専門性を学ぶことが可能になります。卒業後の進路として、高度専門職をめざした大学院への進学や国家資格「公認心理師」や民間資格「臨床心理士」取得のためのサポート体制も万全です。また、多様化や多職種連携が進む民間企業や学校現場など幅広い分野での活躍が期待できます。

1、2年次は「心理学基礎科目」で土台を固め、心の動きや行動を統計学的に処理・分析する「データサイエンス科目」と実社会における心理学の有用性を学ぶ「キャリア啓発科目」で文系・理系の区分を超えた広い知識と柔軟な発想を身につけます。3、4年次は、発達段階に応じた個々の心に迫る「生涯発達カウンセリングプログラム」と多様なコミュニケーションをもとに人との繋がりを自分と他者の心のあり方にアプローチする「関係支援とコミュニケーションプログラム」を軸に、それらを接続的に学ぶプログラム横断科目「データ心理学」の中から学生が自由に選択し、演習をとおして専門的かつ発展的な内容を学びます。

人々がつどい、つながる新しい学び舎

構想400の実現に向けて龍谷大学はキャンパスの機能と学びの充実を図る「キャンパスブランド構想」を推進します。心理学部第1期生が3年生となる2025年4月、人文科学領域の学びの中心となる大宮キャンパスに新校舎「黎明館(れいめいかん)」が誕生します。これまで大宮キャンパスでは文学部の3、4年生のみが学んでいましたが、2025



黎明館につどう人々をつむぐ「共創の樹」

年から心理学部生が新たに加わり、2026年に龍谷大学付属 平安中学校・高等学校が創立150周年を迎えることを機に学びの環境を再整備することになりました。「黎明」とは夜明けのことで、ものごとの始まりを意味します。その名の通り、黎明館は心理学部生の研究と学校法人龍谷大学が全国に先駆けて取り組む「中高大連携」の起点となります。

七条大宮の北西、七条通沿いに建設する黎明館には、大学施設として教室や研究室、臨床心理相談室（大人と子どものこころのクリニック）などを、中高施設として図書館や自習スペース、食堂を含むコミュニケーション施設を配置。一つの校舎を大学と中高でシェアし、ともに学ぶ空間は極めて稀であり、大きな特長と言えます。これまでの「高大連携」を超え、付属平安中高と一丸となってウェルビーイングな未来社会をつむぎだすことのできる人材育成をめざします。エントランスには、学生や生徒だけでなく地域住民や観光客など一般の方々も集え



2025年完成予定の「黎明館」

るオープンテラスカフェを設置し、地域社会との繋がりを生み出します。

さらに、黎明館の意義を象徴的に表現すべく、球体が宙に浮かんだ姿が唯一無二の風景を生み出す新たな構造体「共創の樹（きょうそうのき）（仮称）」を造型します。黎明館のもとに多様な人々がつどい、つながり、新たな価値を創造することで、京都駅西部エリア全体の発展・活性化にも貢献します。地域の方々と手を取り合い、新たな歴史をつむぎ未来へ伝えるランドマークになることを願っています。



第100回『龍谷祭』、3年ぶりの対面開催 伝統を受け継ぎ未来へ繋ぐ

記念すべき第100回『龍谷祭』が2022年10月は瀬田キャンパス、11月は深草キャンパスと5日間にわたり開催されました。『龍谷祭』は、龍谷大学における最大級の学生イベントで、本学が大学令により大学として認可された1922(大正11)年から開催され、歩みを続けてきました。コロナ禍により2020年は中止、2021年はオンラインと対面を併用しての開催。2022年は3年ぶりに全面的な対面開催となりました。

2022年度のテーマは「Pages」。第100回という節目の年にその長い歴史の新たなる1ページを龍谷祭に関わる全ての人々とともに創り上げたいという思いが込められています。総勢408名の実行委員をまとめる委員長の中村駿一さん(経営学部4年)は「コロナ禍の困難を乗り越えて、先輩方が繋い

できた伝統を守りつつ、新たな挑戦に取り組み、それを未来の後輩たちに繋ぐ学園祭をめざします。学生、教職員、卒業生、保護者、広く地域一般の皆さまに心より楽しんでいただける龍谷祭となるよう努めてまいります」と力強く開催を宣言しました。

開催中は実行委員による様々なイベントの実施に加え、有志の学生が深草37店舗・瀬田24店舗もの模擬店を出店。キャンパスが活気にあふれました。最終日には本学伝統の「龍舞」が披露され、その迫力で多くの人を魅了。フィナーレを飾る「Last Fire」では、半年かけて制作した龍を燃え盛る炎が包み込んでいく様子に誰もが胸を熱くしました。

『龍谷祭』の新章はまだ始まったばかり。学生たちの眩いエネルギーは次の世代にも受け継がれていくでしょう。

学生の食生活を支援する「百縁夕食」を実施

2022年12月5日から2023年1月20日までの期間、深草・瀬田・大宮の全キャンパスで「百縁夕食」を実施しました。百縁夕食とは、栄養バランスの取れた夕食を1食100円で提供するとともに、百(多く)のご縁(繋がり)が広がっていくようにという想いを込めて、コロナ禍を機に2021年度から開始した取り組みです。昨今の物価高騰などにより食費を削ら

ざるをえない学生の状況を踏まえ、健康を第一に充実したキャンパスライフを送っていたため、今年度も親和会(保護者会)からの寄付を受け実施しました。

学生からの好評の声を受け、今後も親和会(保護者会)、龍谷大学生協、Café Ryukoku & と連携を深め、日々学業や課外活動に励む学生の皆さんへの支援に努めてまいります。



龍谷大学 Ryukoku Extension Center (REC) 「地域オープンイノベーション拠点選抜制度」に選抜

龍谷エクステンションセンター(通称「REC(レック)」)は2022年10月、経済産業省の「第4回地域オープンイノベーション拠点選抜制度」で地域貢献型に選抜されました。この制度は、企業ネットワークのハブとして活躍している大学等の産学連携拠点を国際展開型と地域貢献型の2類型で評価・選抜し、信用力を高めるとともに支援を集中させ、トップ層の引き上げを促すことを目的とし、経済産業省が伴走支援をおこなっているものです。

龍谷大学は、教育と研究、エクステンション(普及)を大学の重要な使命として位置づけ、このエクステンション活動を中心的に担う拠点として、1991年に全国に先駆け、RECを開

設しました。地域の人々への学びの場を提供する生涯学習事業と、中小企業やベンチャー企業の技術・研究開発を支援する産学連携事業等を中心に展開。現在はREC滋賀(瀬田キャンパス)、REC京都(深草キャンパス)の2拠点体制でエクステンション活動に取り組んでいます。

今般、RECの取り組みについて「地域に根差した活動により、地域に貢献するハブ拠点として評価できる」として選抜されました。今後も、関西圏において「地域に根差した活動」を推進し「地域に貢献するハブ拠点」となるための事業を強化していきます。



03 People, Unlimited

農学部 食品栄養学科 4年生
滋賀県立草津高等学校 出身
小田垣 萌衣 さん

農学部 食品栄養学科 4年生
京都精華学園高等学校 出身
前田 穂乃香 さん

食べる喜びと健康のために 「産官学連携」で高齢者向けレシピを開発

加齢に伴い食が細くなる、運動が不足する、社会との繋がりが少なくなるなどが原因で高齢者の心身が衰え、要介護手前の状態になることをいう「フレイル(虚弱)」。

コロナ禍もあってこの状態が深刻化していることから滋賀県大津市と龍谷大学農学部、株式会社平和堂(滋賀県彦根市)との「産官学連携」によってフレイル予防に役立つ惣菜を開発。レシピの考案・作成を農学部石原健吾教授の運動栄養学研究室に所属する小田垣萌衣さんと前田穂乃香さんが担当し、開発したレシピ6品のうち1品が商品化され、2022年10月27日から12月22日まで平和堂主要店舗で販売された。

二人は「私たちの祖父母の健康も気になっており、高齢者の方のお役に立ちたい」と、レシピのアイデアを練り、試作を繰り返した。「フレイル予防のために摂取してほしいたんぱく質を豊富に含み、美味しく食べてもらえるように、身近な食材と調味料で簡単に調理できることをめざしました」と小田垣さん。完成した惣菜は、かぼちゃのおかずさらだ・つくね・ひじきサラダ・やわらか鶏むねの塩麴の唐揚げ・厚揚げのきんぴら・丁字麩(ふ)レンチトースト〜きなこソース添え〜の全6品。

「近江の伝統食材である赤こんにやくと丁字麩は地元の高齢者の方になじみがあると思い、取り入れました」と前田さん。二人の心遣いも映し出された惣菜は、大津市主催のシニア向け健康講座(全3回)で200名以上の方に試食していただき、味や手軽さはもちろん、レシピへの思いを会場で語る二人の姿に感動する参加者もいた。

商品化では「かぼちゃのおかずさらだ」の採用が決定。平和堂の食材・惣菜のプロからアドバイスを受け、レシピを再調整した二人は「商品のコストや製造工程などについても学ぶことができました」と言う。一方、小田垣さん、前田さんの真摯な取り組みに対して、平和堂は売り場で目立つよう、二人の似顔絵を商品パッケージと店頭ポップに採用した。フレイル予防レシピを知った小学生からは「おじいちゃんのために料理を作りたいです」と本学宛に手紙が届き、二人は感激。「誰かのために作って美味しく食べてほしいという気持ちの大切さを改めて感じました」と前田さん。「多くの方に美味しいと喜んでもらったことが嬉しく、今後のモチベーションにもなりました」と小田垣さん。二人はこの経験をまた誰かの健康と笑顔に繋げていく。

レシピを二人で相談しながら開発する小田垣萌衣さん(左)と前田穂乃香さん(右)



高齢者向け惣菜レシピ集は大津市ホームページで公開
<https://www.city.otsu.lg.jp/soshiki/020/1498/o/51508.html>

03 People, Unlimited

政策学部 政策学科 4年生 (龍谷大学 バドミントン部 男子主将)
熊本県立八代東高等学校 出身
川原 怜也 さん



練習中の川原さん

強豪関東勢を抑え、悲願の初優勝 対話で強くなったバドミントン部男子

2022年10月、大学生の日本一を決める「第73回全日本学生バドミントン選手権大会（全日本インカレ）」団体戦でバドミントン部男子が創部初となる念願の優勝を飾った。これまで関東の強豪大学が独占し続けてきた優勝旗を本学が西日本の大学で初めて勝ち取り、日本一に輝いた。

主将を務める川原さんは、母や兄たちの影響で4歳からバドミントンを始めた。大学進学時に顧問の先生は強豪校の多い関東で実力を伸ばすことを薦めたが、川原さんは「龍谷大学に行って関西から関東を倒したい」と、関東勢に挑む立場を選択。本学に入学した。

コロナ禍の中断を経て再開した2021年のインカレではベスト8に終わる。敗退して引退する先輩たちを見ると悔しさがこみあげた。その後、元日本代表の武下利一コーチ指導のもと、1年後のリベンジに向けて勝利への取り組みが始まった。

「これまでと同じ練習では勝てない。チームが強くなるために、個々の克服課題を互いに話し合い、意見を自主練のメニューにも取り入れました。上下関係なく会話が増え、モチベーションも団結力も格段に上がりました」

文武両道、デュアルキャリアを掲げるバドミントン部は、大学が定める基準よりも厳しい部独自の基準を設けて結果だけでなく人間的成長を一番の目的にしている。一定単位数の取得がなければ次の半期は試合出場不可になるため学問は疎かにできない。川原さんはスポーツサイエンスコースでスポーツ栄養学や身体機能、心理学などを学び、チームビルディングや試合でのメンタル調整などで実践に役立つ知識の大切さを感じている。

主将となった4年生からは授業も減り、10時前からコートへ。13時頃まで自主練、18時過ぎまでチーム練習というバドミントン三昧の日々を、関東に勝ちたい一心で取り組んだ。

「いざ大会では、やっぱり関東の球は速かった。でも準々決勝の早稲田戦ダブルスで、前回インカレ2位のペアにチームメイトが勝った時『いけるかも』と。続く準決勝の明大戦を勝ち抜き、決勝の日体大戦ではチャレンジャーの気持ちで勢いよくいきましました。みんなのおかげで高校からの夢が叶いました」

卒業後は実業団へ。次の目標は個人戦でも強くなることだ。川原怜也選手の活躍にこれからも注目したい。



ファシリテーターとしてグループの意見をまとめる松田さん

※学生団体を対象とした正課外の活動を支援する制度
最大30万円の支援金と活動のサポートをおこなう

03 People, Unlimited

法学部 法律学科 4年生
滋賀県立甲西高等学校 出身
松田 あゆみ さん



自ら気づき明日の行動を変える 脱炭素社会に向けた提言を作成

2021年度に続き2度目の「龍谷大学学生気候会議」が2022年12月に開催された。気候会議とは、環境問題や気候変動問題について市民が話し合い、持続可能な世界に向けた提言の作成を目的とする会議だ。近年ヨーロッパで広まり日本でも関心が高まるなか、本学では学生主体で気候会議を開催した。2022年度は、代表の松田あゆみさんをはじめ2021年度に参加した学生たちにより発足した実行委員会「OC-S(オックス)」と龍谷大学地域公共人材・政策開発リサーチセンター(LORC)が共同で開催した。連携団体や専門家、本学教員と協働で企画から運営までを担い、より発展的な内容にするため学生活動支援制度「龍谷チャレンジ※」に応募し、採択された。2039年までに大学全体で温室効果ガス排出ゼロをめざす「龍谷大学カーボンニュートラル宣言」の取り組みへの提言を目標に議論の先を意識した。

コロナ禍におけるマスク不足を機にモノの再利用を身近に感じ、より強く環境問題に関心を持つようになった松田さん。話し合いを重ねるなかで環境問題に関心のない人の意見こそ必要だと考え、和顔館1階に「CLIMATE CLOCK(クライメイトクロック)」を設置。モニター上に株式会社セイビ堂より無償で提供

される「地球温暖化+1.5°Cまでの残り年日」「緑の気候基金に集まった金額」などのデータがリアルタイムで表示されるシンプルな作りだ。松田さんは「環境に配慮してほしいと啓発活動をおこなうだけでなく目で見て、自ら立ち止まって考えることに意義がある。もちろん会議に参加してくれたらうれしいけど、まずは事実を知ってもらい、今後の行動のヒントになれば」と設置の思いを明かした。

会議当日は講師による話題提供を受け、消費、移動、食などをキーワードに実行委員会の学生がファシリテーターとなりグループごとに大学ができることを考えた。松田さんは運営に携わり、180度視点が変わったという。

「限られた会議の時間で核心に迫る難しさもありましたが、行動を見つめ直したという参加者も多く、想いが伝わっていることを実感しました。人それぞれ行動するタイミングは違うので、様々なことに興味を持ち自分自身が納得できる選択を続けていきたいです」

活動のあゆみと成果は2023年2月下旬、報告会で発表。各グループの議論をもとに提言書をまとめ、本学と京都市に提出する予定だ。心の声に従って行動を起こす力は仲間や先輩、大学へ伝わり明るい未来を拓く鍵となるだろう。

04

Education, Unlimited

先端理工学部
知能情報メディア課程
橋口 哲志 助教

先端理工学部
機械工学・ロボティクス課程
野口 佳樹 講師

学生が自主的に挑み成長 「R-Gap」プロジェクトリサーチ

理系学部には希な自由な学修期間

2020年4月に改組され、新たなスタートを切った先端理工学部。国内の理系学部初の「課程制」、25の多彩なプログラムによる「分野横断型の専門教育」、1年を4つに分割した短期集中履修の「クォーター制」など画期的な学びを実現している。そのなかの一つが「R-Gap (Ryukoku Gap Quarter)」だ。

従来型の理系学部は4年間を通して必修科目を履修し、研究室で卒業研究に取り組む。一方、先端理工学部では3年生の第2クォーター（6～8月頃）には必修科目を置かず、主体的な学修期間として設定。これにより、理系学部では珍しく留学や長期インターンシップ、ボランティアなど自由な活動ができる。そんな「R-Gap」の特徴的な取り組みがプロジェクトリサーチである。個人またはグループで学生が調査・研究に挑むもので、テーマは自由。全て学生の自発性・主体性に委ねられる。最終的に成果・結果を公開し単位認定を図るため、調査・研究を深化させるアドバイザー教員を設定。その窓口と運営に携わったのが知能情報メディア課程の橋口哲志助教と機械工学・ロボティクス課程の野口佳樹講師である。

「今回の3年生は先端理工学部初年度の入学なので、プロジェクトリサーチに挑むのは学生も教員も初めて。本当に参加してくれるのか不安と期待でいっぱいでした」と橋口助教。「初年度なので教員側でもテーマを用意してはいたのですが、蓋を開けてみると、約170名の学生が参加し、自主的に36の企画でプロジェクトリサーチがおこなわれました」と野口講師はうれしい誤算を語る。

テーマをいくつか挙げると、ゲームや学習アプリの制作、瀬田キャンパスに隣接する「龍谷の森」での生態調査、手作り水車を用いた発電、人工知能の調査など、これまでの学びから興味を持ったもの、以前からやってみたかったものと多種多様。ビジネスコンテストや充電自動車レース、美術館でのデジタルアート展示と、学外に飛び出でのプロジェクトもあった。「学生がこれほどまで前向きに取り組んだ理由はコロナ禍もあるでしょう。入学直後からオンライン授業となり、リアルな学び、交流の機会を持てなかった。そんな何かをやりたかった、本来の大学生活の思い出をつくりたかったという気持ちのタネをプロジェクトリサーチで開花させたのではと思います」と二人は分析する。



You, Unlimited

You, Unlimited

You, Unlimited

Faculty of Advanced Science and Technology

Faculty of Advanced Science and Technology

Faculty of Advanced Science and Technology

R-Gap

Ryukoku Gap quarter

先端理工学部では、3年次第2クォーターと夏期休業を合わせた3ヶ月間(3年次の6月中旬～9月上旬)を、主体的に活動できる期間を「R-Gap」と位置づけています。具体的には、留学やインターンシップ、研究に取り組みることができます。夏期休暇に併せずにご自分で期間を決め、ボランティアなど、短期間に終わらせるような活動ができます。みなさんが自分のペースで多様な活動ができるよう実現します。



先端理工学部「R-Gap」
<https://www.rikou.ryukoku.ac.jp/rgap/>



今後の自分に役立つことを実感

学生たちが「とにかくやってみよう」と意欲的に取り組んだプロジェクトリサーチだが、進行中には苦労もあったようだ。「実はこれもプロジェクトリサーチの狙いです。壁にぶつかり、試行錯誤してこそ、今後の研究や社会で必要不可欠な課題解決能力が養われていくからです」と野口講師。「調査・研究を突き進めるためには、客観的・批判的な分析、教員からの専門的見地によるアドバイスも重要です。そのため学生の自主性を最優先しながら必要に応じて先端理工学部

の先生や研究室を紹介したり、3Dプリンターをはじめ施設設備の活用をアドバイスしたりしました」と橋口助教。二人をはじめ、先端理工学部の教員、スタッフのサポートもあり、3か月にわたる調査・研究を成し遂げた学生たち。成果は、2022年10月に開催された龍谷祭にてポスターセッションを実施し、多くの人に披露。RECを介して、龍谷大学と連携する滋賀県中小企業団体中央会に審査いただき、12月に開催された評価報告会にて10の企画が「ものづくりプロジェクト大賞」などで表彰を受けた。

2023年4月より4年生になった学生たちは既に卒業研究に取り組んでいる。「あのとき得たチームワークや実行力が活かされてい



「STEAMコモンズ」を活用する学生たち

る」「報告書の作成、スケジュール管理など事務的なスキルも身についた」とプロジェクトリサーチの効果を実感しているよう。橋口助教は「プロジェクトリサーチ後の学生は必要かつ自分に不足している知見を積極的に学びにいく姿勢が高まったと思います」と成長を評価。野口講師は「私は学生時代に海外留学を断念した経験があるので、R-Gapは素直に羨ましく思います。また、理系の調査・研究においては自分が楽しく取り組むことも大切です。次の学生たちはR-Gapで楽しく様々な経験を積んで、学修や卒業研究、さらに自らの将来にも役立ててほしいと思います」とR-Gapでの期待を語った。



橋口哲志

2005年職業能力開発総合大学校福祉工学科卒業。2007年九州工業大学大学院生命体工学研究科博士前期課程修了。2013年九州大学大学院芸術工学府博士後期課程修了。立命館大学情報理工学部×ティラ情報学科特任助教を経て、2018年より現職。



野口佳樹

1997年上智大学理工学部機械工学科卒業。2002年上智大学大学院理工学研究科機械工学専攻博士後期課程修了。2008年カリフォルニア大学デービス校客員研究員。龍谷大学理工学部機械システム工学科助手を経て、2011年より現職。

04 Education, Unlimited

社会学部
高田 満彦 教授

大学は社会共生に何ができるのか 足を運び、ともに考えた先に見えるもの

社会学部の視点が生む可能性

社会学部の中核科目の一つである社会共生実習は徹底した現場主義のもと、社会が抱える課題への理解を深め、地域の方々とともに課題解決をめざす実習だ。社会学科・コミュニティマネジメント学科・現代福祉学科と社会学部全3学科の学生が様々なプロジェクトから関心のあるものを選び、受講する。

高田満彦教授のプロジェクトでは「活用」をキーワードに「大学は社会共生に何ができるのか—文化財から“マネー”を創出する—」というテーマのもと問題解決にむけて取り組んでいる。高田教授は「地域課題は、住民の視点と外部の視点にズレがある。そこで大学が社会共生にどのように貢献できるのか、時間はかかるけれども放っておけない問題に向き合うことが大事」とプロジェクトの主題を語る。2022年度は3学科15名の学生が参加。まずは文化財やフィールドワークの基礎知識を学び、その知識をベースに現場へ出て行く。学科や学年の垣根を越え、社会人と関わりながら文化財というテーマに向き合うことで新しい見方を養えるのも魅力的だ。

「社会学部生なので文化財や歴史に関して
は素人。だからこそ生まれる柔軟な発想に期

待したい。近年、学際的研究という従来の研究領域を越えた幅広い分野からのアプローチが注目されていて、史学に対して社会学の観点、さらに3学科それぞれの視点を活かしたアイデアで何かできないかと。もちろん社会共生ですから現場に足を運び、課題を見つけ、暮らしている方々と一緒になって問題解決へ向けて考えていきます」

2019年4月文化財保護法改正により国の補助金に頼らず、保存と継承のために文化財所有者自らが文化財を活用し、財源を確保しなければならなくなった。法改正前から文化財の活用に注目していた高田教授は、NPOや行政と膝を交えて話し合い、公共政策、観光、マーケティングなどを織り交ぜ、社会学的手法で手助けしたいと考えていた。研究フィールドとなる滋賀県は全国でも有数の文化財保有数(国宝全国5位、重要文化財4位)を誇りながらも京都や奈良ほどの経済効果は生まれていない。2022年度は大津市が復活させた「疎水船」の活用案作成に向けて、近江の祭り・観音ガール・八幡堀の3チームに分かれて各地域の文化財が置かれている状況を調査。「参画」を活動目標に計画段階から関わり、調査や体験から見えてきた課題の解決には何が必要か話し合いを重ねた。





一筋縄ではいかない文化財の保存と活用

文化財は、現状を維持し後世に伝える『保存』と、広く社会から認知される『活用』のバランスが取れた時に真価を発揮する。ただし文化財と地域住民の生活が守られる範囲で活用していくことが条件だ。その前提のもと3チームが協力しながら実習が進められた。

近江の祭りチームは、3年ぶりに開催された大津祭で来場者へのアンケート調査や曳き手体験などをおこなった。アンケート調査の結果から郷愁に誘われた大津市外からの参加者も多く、人の心に文化が根付く重要性に気づいた。観音ガールチームは、湖北で暮らす人々にとっての観音様の役割を探っ

た。観音様に手を合わせることは湖北で暮らす人々の生活の中に深く根ざしているため、文化財としての活用が難しいケースもあるということがわかった。八幡堀チームは近江八幡観光物産委員会と八幡堀まつりに向けた会議を重ね、学生たちが企画・運営した夜遊びツアーは大盛況に終わった。

「人々を結びつける大事な資本を社会関係資本と言います。この求心力を活かせば地域活性化に繋がる。反対に強すぎると排他的になってしまう。絆と同じで強ければ強いほど良いわけではありません。文化財や地域の特徴を深く理解し、魅力を伝えたい相手を意識した活用が求められます」と高田教授。各チームが得た知見をもとに大津



大津祭でアンケートをおこなう学生たち

市役所観光振興課に疎水船の活用案を提出。行政側の回答を受けて様々な立場の意見を理解し、葛藤する場面も見られた。

「行政やNPOなどの意見と折り合いをつけていくのが難しいところ。活用はありのままの形を残したいという文化愛とは相反するものかもしれません。保存のための手段として常に変化しなければならない、ここがまさに『保存』と『活用』のジレンマです」

2023年1月に社会共生実習合同報告会、2月にプロジェクト発表会でお世話になった専門家の方々や地域の人々に向けて成果を報告した。2023年度以降も学生たちの活動は続く。社会に出て、ここで身につけた主体性をどう活かすのか期待は膨らむばかりだ。



高田 満彦

慶應義塾大学文学部史学科(国史学専攻)卒業。京都大学大学院教育学研究科(教育社会学)修了。専門は日本古代史、教育学、社会学。

現在の研究上の関心は3つの分野にあり、史学では、古代近江の渡来文化、東アジアのなかの古代環日本海文化圏、教育学では教科教育法で社会科好きの子どものと育てるか、社会学では大規模自然災害とコミュニティの在り方をテーマとして研究を進めている。

05 Research, Unlimited

農学部 食品栄養学科
楠隆 教授

年齢別FA有症率

子どもの食物アレルギーが減少 新たな予防策の効果を示唆

完全除去から早期摂取へ転換

日本人の2~3人に1人が有しているとされるアレルギー疾患。花粉症をはじめアレルギーのリスク因子は、環境問題など様々な事柄が関連しているため、社会全体の課題となっている。さらに、近年、増加傾向にある子どもの食物アレルギーは、乳児期から発症するといわれ、成長とともに他のアレルギー疾患を発症する可能性も否めない。

乳幼児の食物アレルギー予防は、これまでアレルギーの原因となる食物を含む離乳食を早期から与えないように指導されてきた。「ところがピーナッツアレルギーの多い欧米の研究で乳児期早期からピーナッツの摂取を開始した子どものアレルギー発症率が低下したとの報告がありました」と語るのは、小児科医師でもある楠隆農学部教授。

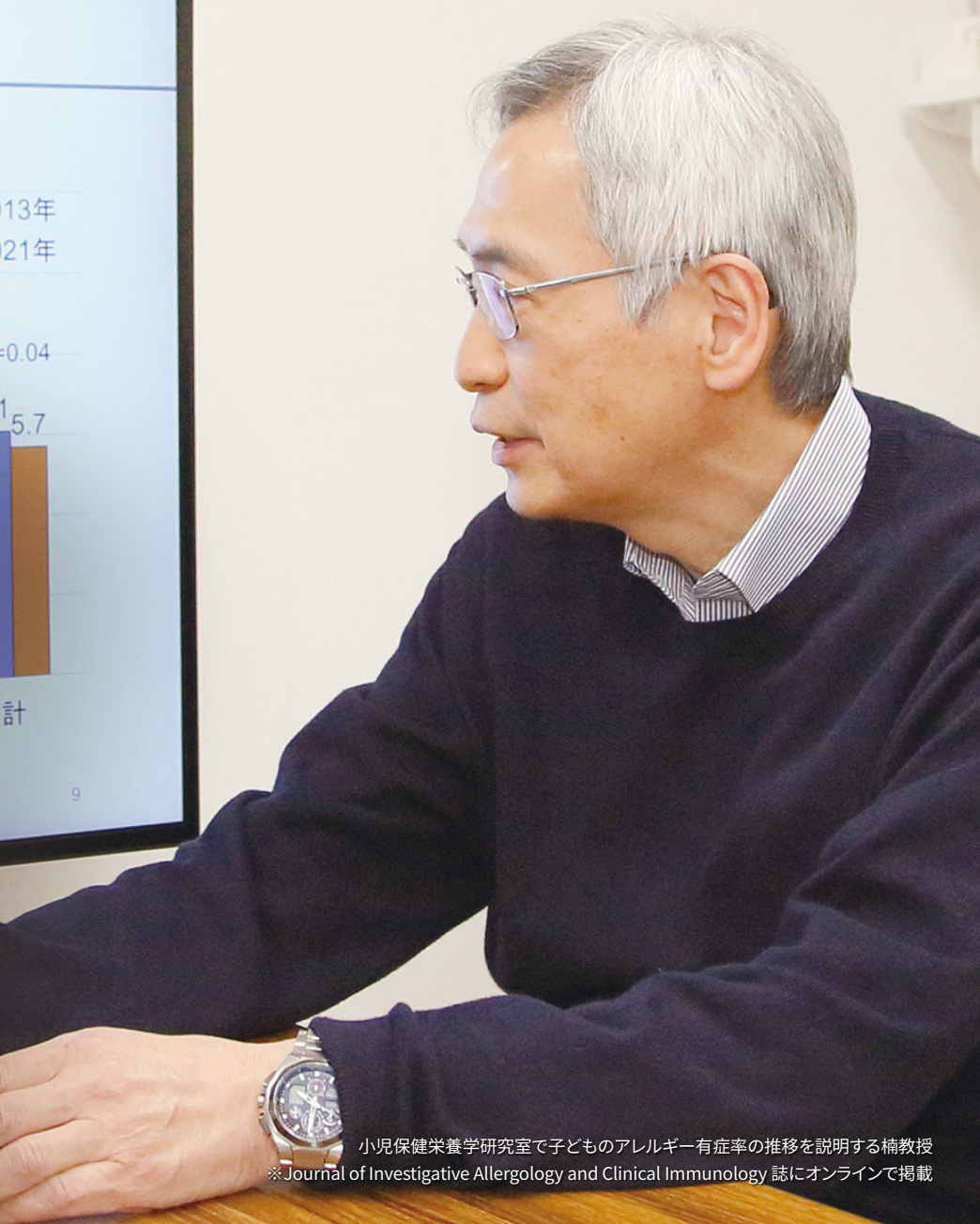
欧米での研究を受けて、日本では子どもの発症率が高い鶏卵を乳児期早期から摂取させる介入研究をおこなうと、鶏卵アレルギー発症の予防が期待できると示された。この結果を受けて2017年に日本小児アレルギー学会が少量の加熱卵の早期摂取を推奨する提言を発表。2019年からは厚生労働省の『授

乳・離乳の支援ガイド改訂版』に「離乳食や鶏卵などの特定の食物の摂取の開始を遅らせても、食物アレルギー予防の効果があるという科学的根拠はない」と明記され、子どもの食物アレルギー予防の方針が大きく転換した。

このような背景のなかで、楠教授は、主宰する本学小児保健栄養学研究室と、自身がアレルギー疾患の治療にあたる滋賀県立小児保健医療センターによる共同研究として2021年に滋賀県内の全保育所の子どもの食物アレルギーの調査を実施。2013年に同一の地域・手法で実施した結果と比較すると、食物アレルギーと診断された子どもが6.1%から5.7%に減少。食品別では鶏卵アレルギーの有症率が4.6%から3.6%に。子どものアレルギー有症率が減少傾向に転じていることが判明し、国際的な英文学術誌※に結果が掲載された。

「2019年以降に出生した2歳児、1歳児、0歳児のアレルギー有症率が減少していたことを考察すると、国や学会の提言、指導が有効である可能性が示唆されたと思います」

楠教授は今後も滋賀県での調査を継続。早期摂取の効果をさらに検討すべく、全国での調査への進展も期待しているという。



小児保健栄養学研究室で子どものアレルギー有症率の推移を説明する楠教授
※ Journal of Investigative Allergology and Clinical Immunology 誌にオンラインで掲載



次世代の子どもの健康のために

楠教授は、子どもの食事と生活習慣の研究にも取り組む。「成人においては、疫学や栄養学などの研究が進み、塩分や特定の食品の過剰摂取が動脈硬化やがんを誘発するといった食生活と疾患との関連が明らかになっています。子どもも健康的な食事を心がけていけば、将来の疾患のリスクが軽減できますが、大人になってからのリスクを避けるために食生活に気を付けてといわれても子どもにとっては現実的ではありません。そこで、私は正しい食生活が今現在の子どもにもたらずメリットを示していきたいと考えています」

研究では、滋賀県内の小学2年生を対象に5年生になるまでの3年間、身体測定や学校の出欠状況、疾病の罹患、食事内容、生活習慣などについて、学校に赴いて追跡調査している。「食生活の調査は、聞き取りやアンケートが一般的ですが、回答にバラつきや個人差があることから、より正確なデータを得るためにベジメータ®という光学的皮膚カロテノイド量測定装置を導入して調査しています」

ベジメータ®は、専用の機器に中指の指先を挟むとLEDの光が照射され、皮膚のカロテノイド量をわずか10秒ほどで測定。その場で野菜・果物の摂取状況を0から1200の数値にスコア化できるという。

ベジメータ®でカロテノイド量(野菜・果物の摂取状況)を測定する様子

「カロテノイドは緑黄色野菜や果物に多く含まれます。野菜・果物は抗酸化作用をはじめ様々な効果が期待され、健康的な食事の要となります。そのため、カロテノイド量と聞き取り調査を解析すれば、子どもの野菜・果物の摂取状況や栄養バランスなどが判断でき、疾患などとの関連も考察できます」

疫学研究者として、小児科医として、アレルギーをはじめ子どもの疾患を解決したいと研究や治療をおこなう楠教授。

「少子化が進む日本において、子どもたちは大切な存在です。健康かつ健全に成長し、次世代を担えるよう力を尽くすことが小児医療や研究に携わる医師、研究者の使命です」



楠 隆

京都大学医学部医学科卒、京都大学大学院医学研究科博士課程修了。米国ロックフェラー大学細胞生理学・免疫学教室留学、滋賀県立小児保健医療センター小児科主任部長などを経て、2020年より現職。医師(日本小児科学会専門医、日本アレルギー学会認定専門医・指導医)、日本小児アレルギー学会理事・代議員、日本小児保健協会代議員。

05

Research, Unlimited

先端理工学部 電子情報通信課程
龍谷大学 革新的材料・プロセス研究センター 研究員
木村 睦 教授

理工学研究科 修士課程 2年生
愛知県立半田高等学校 出身
岩城 江津子 さん

人工知能がより身近に 画期的な半導体実装に成功

誰もが人工知能を使える足がかり

龍谷大学 革新的材料・プロセス研究センター 研究員の先端理工学部木村睦教授と木村睦研究室に所属する岩城江津子さん(理工学研究科修士課程2年)を含む研究グループ「メモリストアチーム」は、アモルファス金属酸化物半導体(AOS)薄膜をニューロモルフィックシステムに実装できる手法を開発。この成功に関する研究論文^{*1}が世界最大の技術専門家組織IEEE^{*2}の国際ジャーナルに掲載される快挙を達成した。

ニューロモルフィックシステムとは、人間の脳の構造を模倣した高度で複雑な計算システムを構築し、高速かつ低消費電力で脳の機能を再現するもの。大型コンピュータの文字の読み取りや音声聞き取り、画像認識といった人工知能全般の用途での使用が進んでいる。一方で人工知能のさらなる実用化と普及に向けては課題がある。「翻訳や文字認識、会話といったツールで普及している人工知能は、インターネットを通して超大型コンピュータからリアクションがあるというものです。ただ、超大型コンピュータには多大な集積回路(LSI)が必要で、スマートフォンやPCなど身近なモバイル、家電には搭載できません」と木村教授。この解決において、論文

の筆頭著者である岩城さんは、多大なLSIと同等の機能を1チップにする手法を発見。アモルファス金属酸化物半導体(AOS)薄膜を用いた多層クロスバーアレイという独自の半導体チップを開発したのだ。

「人間の脳には1000億以上ともいわれる神経細胞が存在し、これらが電気信号を発することで、高度な情報処理がおこなわれています。これを人工知能で実現させるには人間の脳を再現したデバイスが必要です。しかもコンパクトかつ低消費電力で人間の脳に近い高度な性能を求められることから、この研究に打ち込みました」と岩城さん。開発した半導体チップは高集積化が簡便で、小型化、低消費電力化という点でも優れた性能を発揮できるという。

「今回の研究によって小型機器にも人工知能を搭載でき、インターネットを介さずとも活用、携帯が可能で。また人工知能の学習機能によってカスタマイズされていくと、一人ひとりの言葉遣いや専門領域の言語に応じた翻訳ができるなど、まさに相棒のような存在になるのではないのでしょうか。だからこそ、岩城さんたちの試みは素晴らしいと思います」と木村教授。1人に1つ、人工知能を。そんな日常へと大きく前進したことはいうまでもない。



Feature Article

People, Unlimited

Education, Unlimited

Research, Unlimited

Connect, Unlimited

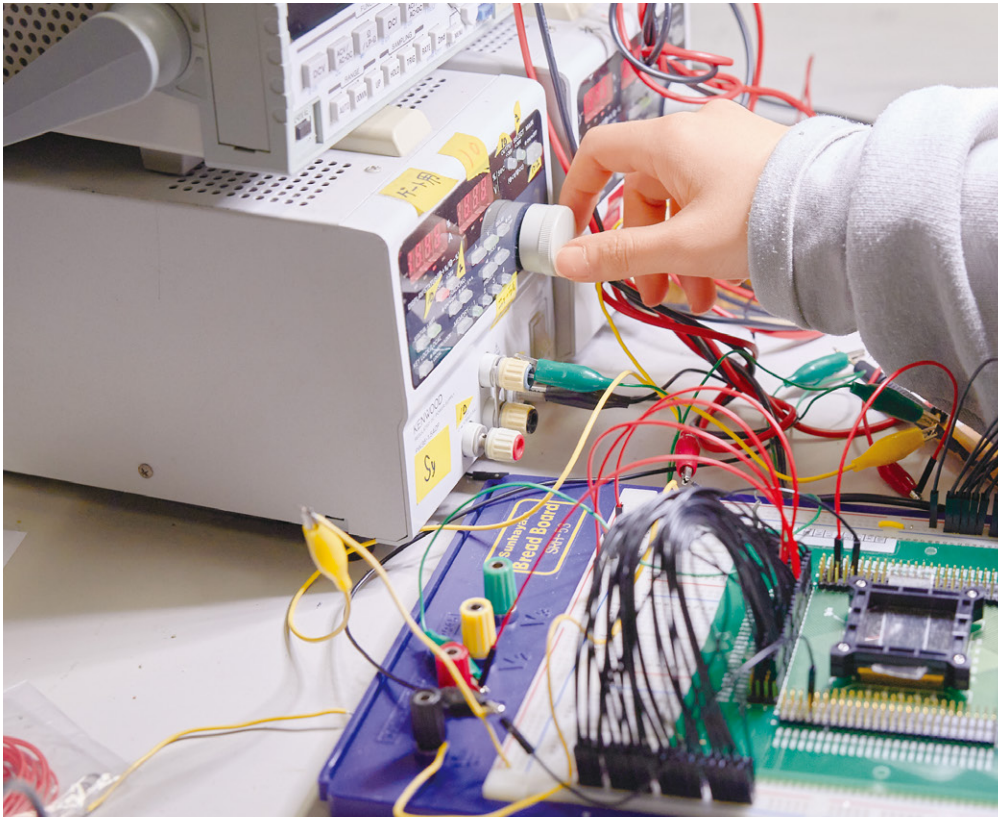
News & Topics

※1 論文タイトル

「Multilayer Crossbar Array of Amorphous Metal-Oxide Semiconductor Thin Films for Neuromorphic Systems」

(和訳: アモルファス金属酸化物半導体薄膜のニューロモルフィックシステムへの実装)

※2 IEEE:「アイ・トリプル・イー」と読み、Institute of Electrical and Electronics Engineersの略。世界160カ国以上、40万人を超える会員からなる専門家組織



先輩たちの研究と情熱を継承

岩城さんが研究対象とする電子デバイス・材料と人工知能に出会ったのは本学部生時代のこと。「多大なLSIの1チップ化の研究に出会ってここまで打ち込めたのは、これが私一人のテーマではなく、研究グループ歴代の先輩たちが実験・研究を積み重ねていたからです。たまたま私たちの代で実験が成功して人工知能への活用まで上手くいっただけのことです」と先輩から後輩へ受け継がれていく研究課題の存在が大きいと話す。

「この領域は、デバイスの特性を確認すれ

ば終了ではなく、みんなで作ったデバイスへ人工知能、ニューロモルフィックシステムへの実装まで持っていき、結果まで見られることが楽しく、やりがいを感じます」

研究の英文論文は岩城さんを中心に資料収集から原稿完成まで約1カ月。投稿後は先方からの質問や修正について木村教授と検討・更新を重ね、執筆開始から約半年後、受理に至った。「掲載された実験データを取り始めたのは岩城さんが学部4年生の終盤。ラボの実験期間としては3～4年におよびます」と木村教授。これまでの研究が権威ある機関から認められたことは感慨深いだろう。さらに研究結果を新たに日本語で執筆した和



木村 睦

京都大学工学部物理工学科卒、京都大学大学院工学研究科物理工学専攻修士課程修了。松下電器産業株式会社、セイコーエプソン株式会社での研究職を経て、2003年龍谷大学理工学部電子情報学科着任。龍谷大学理工学部電子情報学科助教授・准教授を経て、2008年より現職。



岩城 江津子

龍谷大学大学院理工学研究科修士課程2年生。学部生時代からアモルファス金属酸化物半導体薄膜のニューロモルフィックシステムへの実装を研究。カリフォルニア大学サンディエゴ校の半導体ラボに短期留学を経て、大学院修了後、半導体製造企業に就職予定。

※3 論文タイトル「積層In-Ga-Zn-O薄膜を利用したニューロモルフィックデバイスの知的学習への応用」

※4 一般社団法人 電子情報通信学会 (IEICE) 発行の学会誌

文論文^{※3}が国内ジャーナル『IEICE』^{※4}に掲載予定だ。「研究では、論文の執筆や発表はもちろん、論文にできるだけの結果を出すことが重要です。また、私がそうだったように、継続課題や先輩たちが研究にかけてきた思いを後輩たちに受け継いでいってもらえるとうれしいです」と岩城さん。「上手くいくかわからないけれど、誰もやったことがないことに挑戦できる、自分のアイデアが成功に結びつく研究の醍醐味を今後も学生たちと味わっていきたいです」と木村教授。チームに脈々と継承される情熱がニューロモルフィック分野でのさらなるイノベーションと、社会実装での知の活用を実現していく。

親鸞聖人と聖徳太子の深い縁 六角堂の夢告が真宗を生んだ

春季特別展

親鸞聖人御誕生850年・立教開宗800年記念

『真宗と聖徳太子』

2023年4月1日(土)～5月28日(日)

休館日：4月17日(月)、5月1日(月)、5月15日(月)、
5月22日(月)

主催：龍谷大学 龍谷ミュージアム、朝日新聞社、京都新聞

2023年は親鸞聖人誕生850年、そして立教開宗800年。龍谷ミュージアムでは、これを記念して春季特別展『真宗と聖徳太子』を開催する。なぜ聖徳太子なのか？

「2021年に1400年御聖忌を迎えた聖徳太子に対して、親鸞聖人はなみなみならぬ深い思いを抱いていました。本展では、太子を讃えた親鸞聖人自筆和讃4点をはじめ、真宗が生んだ太子ゆかりの宝物約90点を展覧します。両者の深い繋がりを多くの人に知っていただければ」と語る龍谷ミュージアム石川知彦副館長。

親鸞は29歳の時、比叡山を下り、現在の京都市中京区にある六角堂に百日間参籠した。95日目に夢に現れ、当時新たな教えを広めていた法然の弟子になるよう、夢告したのが聖徳太子だった。

「つまり聖徳太子こそ親鸞が専修念仏の道に入るきっかけをつくった人だったのです」このため親鸞は太子を「和国の教主」と仰ぎ、仏道を歩むにあたっての手本とした。やがて

阿弥陀如来とともに聖徳太子像を安置することが真宗寺院の伝統となっていく。

「聖徳太子と聞けば、かつての紙幣に描かれた姿を想起する人も多いでしょう。ですが、髭に笄(しゃく)を持つあの姿は、実は近代以降に作られたイメージです。それまで長らく日本人が崇める太子の姿は少年の姿でした。そしてその信仰を支え牽引してきたのが真宗なのです」

本展では、重要文化財の親鸞聖人伝絵(大阪・天満定専坊)、聖徳太子が初めてお念仏を唱えた太子2歳の像3点(福井・称名寺ほか)をはじめ、太子信仰に関わる多彩な法宝物を3章構成で展示。会期中には聖徳太子絵伝の絵解きの実演など関連イベントも開催する。真宗十派が総力を結集して同時期に開催される京都国立博物館の特別展『親鸞一生涯と名宝』とともに、親鸞と真宗を深める貴重な機会となる。



聖徳太子絵伝を解説する
龍谷ミュージアム 副館長 石川知彦



龍谷ミュージアム
Webサイト



和朝太子先德連坐像(部分) 法眼良円筆 南北朝・至徳元年(1384) 奈良・順照寺

07

Connect, Unlimited 龍谷大学をつなぐ対談

法学部 法律学科 3年生 法学部 法律学科
三須 愛子 さん × 古川原 明子 教授

「えん罪」のない世界へ えん罪立証への無償支援を

間違った目撃証言、取調べでの虚偽自白などにより犯人とされてしまう「えん罪」。そんなえん罪に苦しむ人を無償で支援するため、法学者、弁護士、心理学者、情報学者、一般市民などにより「イノセンス・プロジェクト・ジャパン（えん罪救済センター）」（以下IPJ）が2016年に設立された。各分野の専門家がえん罪当事者の無実の訴えをDNA型鑑定などの科学鑑定により立証できるかを検討し、支援決定後の弁護活動も含め無償でサポートしている。このIPJのメンバーである法学部古川原明子教授と、IPJの学生ボランティア三須愛子さん（法学部3年）がIPJの活動内容や今後の目標について語り合った。

三須: 入学時から犯罪学や更生支援について勉強していましたが、また違った観点から視野を広げたいと思っていました。その時、古川原先生からIPJについて教えていただき「えん罪」というものを知りました。罪を犯していないのに犯人とされてしまうことに怖さを感じるとともに、法医学や科学の視点から犯罪を分析していくことにも興味を持ち、IPJの活動をサポートする学生ボランティアになることを決めました。

古川原: IPJの活動を広く知っていただくための広報活動では学生の新しい視点も有効です。

三須 愛子

法学部法律学科3年生。静岡県立伊豆中央高等学校出身。古川原ゼミ（刑法）所属、元ゼミ長。入学時から積極的に学びを深め、法務省主催の国際イベントにはこれまでに2回参加。1年生を様々な面でサポートするクラスサポーターとしても活躍。

広げる

IPJには様々な大学から約120名の学生がボランティアとして参加し、勉強会や広報活動をおこなっています。

三須: 現在、龍谷大学では私を含め15名の法学部の学生(院生含む)が参加しています。これまでに講演会でのインタビュアーやシンポジウムでの司会などを務めました。活動の様子は主にTwitterで発信しています。

古川原: IPJのホームページリニューアルも学生ボランティアの意見を取り入れましたよね。

三須: 大学ごとに各コンテンツの作成が割り振られました。そこで、私たち龍谷大学メンバーはQ&Aコーナーを担当しました。

古川原: これは私から担当をお願いしました。学生、とくにまだ刑法や刑事訴訟法を受講していない学生に向いていると思ったからです。

三須: 確かにその通りでした。まだ専門知識が不足している私たちだからこそ、一般の人と同じ目線で疑問を考えることができたと思います。IPJの先生方からの回答がわかりやすいかについても、感想を出しました。もちろん、えん罪への知識も深まったので、Q&Aコーナーを担当して良かったです。

古川原 明子

龍谷大学 犯罪学研究センター 科学鑑定ユニット長、子ども虐待えん罪を考える「SBS検証プロジェクト」コアメンバー。IPJには2021年より学生とともに参加。専門は刑法学。生命・身体に関する個人の自律的主体性を国家が制約しようとする場面を中心に検討している。



古川原: IPJには設立6年間で500件近いえん罪を晴らして欲しいという支援申込みがありました。えん罪当事者の支援にあたっては、専門家による鑑定費用、交通費、印刷代、通信費その他の多額の費用が発生します。安定的な資金を必要とするため、IPJでは2022年10月にクラウドファンディングを実施しました。

三須: 学生たちも、どのようにIPJの意義を伝えればクラウドファンディングの成功に繋がるかを考えて、定例会議で意見を出し合いました。

古川原: 結果、予想を遙かに上回る約500名の方々からご支援(寄付)をいただき、法人化の手続きを開始しています。

三須: 支援してくださる方が日に日に増えていって、とてもうれしかったです。

古川原: 支援者の中には20代、30代と若い方もたくさんいらっしゃいました。えん罪問題が、社会の一人ひとりにも関わる人権問題だと捉えてもらうことは難しいだろうとこれまでには思っていました。しかし、今回、多くのご支援や力強いメッセージをたくさんいただきました。刑事事件で活躍する専門家やえん罪当事者に加えて、三須さんのような学生さんが多く関わったことが、社会の関心を高めたのだらうと思います。

三須: 古川原先生にそういっていただけると、

古川原: 裁判で判断するのが人である以上、残念ながら誤りの可能性はゼロではありません。また、日本の刑事司法制度には、えん罪を生みやすいという構造的問題もあります。この点については、三須さんはもちろん、学生ボランティアの皆さんには授業でしっかりと学び、考えてもらいたいと思います。そうした教室での学びと、IPJでの活動が両輪となって、社会問題に取り組む姿勢が育っていくことを期待しています。

三須: 龍大IPJは2017年に法学部の斎藤司教授とゼミ生により始まりました。今後は新入生や法学部以外の学生にもメンバーを増やして、先輩が開いた道を絶やさぬようにしたいです。えん罪当事者の支援は「大変そう」と思われてしまうのですが、私自身は学生ならではの課外活動としてとても充実しています。他大学の学生と交流できることも魅力です。

古川原: IPJでは「日本の刑事司法がフェアであることは、私たちの社会にとって望ましいこと」というメッセージを掲げています。学生ボランティアの皆さんについては、より良い社会に向けて「自分にもできることがある」という実感を抱いてくれることが何よりの喜びです。また、龍谷大学は「犯罪学研究センター」や「矯正・保護総合センター」といった刑事法に関わりの深い研究施設を有しています。研究と教育を相互に深め、それを社会に還元するための絶好の環境が揃っていると言えるでしょう。こういった龍谷大学の強みを活かしながら、今後もIPJの活動に力を注いでいきたいと思っています。

活動へのモチベーションがアップします。

古川原: 現在は、継続的な寄付・支援をいただくための「IPJサポーター」の募集をおこなっています。クラウドファンディングの成功で感じたえん罪に対する問題意識の高まりをいかに持続させるかが今後の課題です。再審問題も注目を集めている時期なので、様々な専門家・研究者と連携しながら進めていく予定です。

三須: えん罪救済に向けた大きな波を作ることに関わるとしたらとてもうれしいです。法律の授業に対する姿勢も積極的になりました。また、広報活動やイベント運営なども将来に活きる学びになっています。

インセンス・プロジェクト・ジャパン
<https://innocenceprojectjapan.org/>



最新情報

※マスクを外して写っている写真は
撮影時のみマスクを外しています



経営学部 松永研究室が 「スポーツ庁長官賞」を受賞 産公学連携プロジェクトとして始動

2022年7月に開催された「日本スポーツ産業学会第31回大会」のアイデアコンペに出場した経営学部スポーツサイエンスコース松永研究室(学生3名、教授1名)が最優秀賞の「スポーツ庁長官賞」を受賞した。過疎地域の運動部活動の課題をICT活用で解決する企画内容を、企業や大学教員たちと競う緊張感ある状況下でゼミ生はプレゼンテーションを披露し栄光を掴んだ。受賞後、実証実験を始動。産公学連携プロジェクトとして実現化をめざす。



柔道部女子がインカレ柔道で準優勝 「全日本学生柔道体重別団体優勝大会」

全国の予選を勝ち抜いた大学が「学生日本一」の称号をかけて戦う「2022年度 全日本学生柔道体重別団体優勝大会(インカレ柔道)」が2022年10月にベイコム総合体育館(兵庫県尼崎市)で開催された。各チーム7名が抽選により決められた体重別階級順に試合をおこなう点取り式のトーナメント団体戦。準決勝では前回優勝大学を僅差で破り2018年の初優勝以来の決勝へと駒を進めた。決勝では惜しくも敗れたが見事準優勝に輝いた。



「第70回全日本吹奏楽コンクール」大学の部 3大会連続・通算13回目の金賞を受賞

吹奏楽部は「第72回関西吹奏楽コンクール」(2022年8月)で金賞を受賞し、関西代表として「第70回全日本吹奏楽コンクール」大学の部(2022年10月)に出場。全国から各ブロックの代表13校が演奏を披露するなか、3大会連続・通算13回目となる金賞を受賞した。丁寧な美しい音づくりを意識し、部員同士の意見交換と課題共有を活発にすることで一体感が創り上げられていった。12月には「第49回定期演奏会」を開催し、感謝の音色を披露した。



経営学部 藤岡ゼミ×「GOOD NATURE MARKET」 地球に優しいアップサイクル調味料を 開発・販売

「ぶどう山椒の発祥地を未来へつなぐプロジェクト」に取り組む経営学部藤岡ゼミとサステナブルな商品開発をおこなう京都発の食品ブランド「GOOD NATURE MARKET」(株式会社ビオスタイル)は「未利用資源活用」をテーマに産学連携してオリジナルデュカ『アラビアンナッツ&スパイス』を共同開発し、2022年10月に全国発売した。「龍谷マルシェ」などでも販売し、売上の一部は産地存続のためぶどう山椒の苗木購入資金にあてる。



創部初、学生プロゴルファーの誕生 ゴルフ部 仲村果乃選手がプロテストに合格

日本女子プロゴルフ協会主催の2022年度最終プロテスト(2022年11月開催)において、ゴルフ部の仲村果乃選手(経済学部2年・スポーツサイエンスコース)が見事合格した。ゴルフ部の創部から50余年、大学に在籍しながらのプロテスト合格は創部初の快挙。合格者は20位タイまでという東大より狭き門のプロテストに、トータル4アンダー・9位で合格した仲村さんは「いろんな方々から愛されて応援して頂ける選手になりたい」とプロへの抱負を語った。



農学部 × 日本料理 新月 龍谷米を使用した『小豆粥』を開発

地域に貢献できる研究・教育をめざす「持続可能な食循環プロジェクト」に取り組む農学部では、農学部生が農場で育てた龍谷米と大粒の大納言小豆を使用した『小豆粥』(レトルト)を日本料理新月(大津市)との共同開発で製品化。農作物を付加価値のある商品にすることで新たな地域資源の創出と農業の六次産業化へと繋げ、地域活性化をめざしていく。



龍谷メルシー・オンラインショップ
<https://store.shopping.yahoo.co.jp/ryukokumerci-online/rm-np027.html>



「関西学生アメリカンフットボール秋季リーグ」 2部リーグ優勝を勝ち取り、1部昇格決定

「学生日本一」を決める出場権獲得をかけた戦う「関西学生アメリカンフットボール秋季リーグ」が2022年9月に開幕。アメリカンフットボール部 SEAHORSEは、優勝と同時に1部リーグへの昇格が決定する2部リーグ戦で、宿敵の神戸学院大学に引き分けの勝ち点をもぎとり、最終戦では大阪公立大学を28-7で制して念願の優勝と同時に1部リーグへの復活を果たした。来季は2019年以來3年ぶりとなる1部リーグの舞台で戦う。



創部初、Bリーグの特別指定選手に加入 男子バスケットボール部 高橋克実選手

2022年12月、男子バスケットボール部のエース高橋克実選手(経済学部4年)がジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグ(略称:Bリーグ)のB1リーグ所属のクラブ「千葉ジェッツふなばし」に特別指定選手(2022-23シーズン)として加入することが決定した。加入に際し高橋選手は「ルーキーらしくアグレッシブなプレーでチームの勝利に貢献できるよう精一杯がんばります。応援よろしくお願いします」と意気込みを語った。



一般同好会 アカペラグループ「ささめき」 『ハモネプ2022 クリスマスSP』で5位入賞

瀬田キャンパスで活動する学生6名のアカペラグループ「ささめき」が、TV番組の青春アカペラ甲子園『ハモネプ2022 クリスマスSP』(2022年12月24日放送・フジテレビ系)で5位入賞を飾った。エントリー総数183組から12組が決勝へ進みアカペラ学生日本一をかけて挑む夢のステージ。「ささめき」はボイパ無し・コーラスのみでバラード「Last Christmas」(Wham!)、「Everything」(MISIA)を天使の6声と評されるハーモニーで聴衆を魅了した。



「龍谷大学 おしえて!センパイプロジェクト」 卒業生による龍大生応援事業を始動

新しい学生応援事業「龍谷大学 おしえて!センパイプロジェクト(ROSP)」が始動した。コロナ禍で落ち込んだ学生のマインドを大学とセンパイ有志が応援する新プロジェクト。第1回は2022年12月に経営者のセンパイ有志3名による講演会を実施。大学時代のエピソードから現在に至るまでをパネルディスカッション形式で学生と交流を図りながら応援の想いを届けた。今後も大学とセンパイが連携して龍大生応援事業を展開していく。

1.17防災未来賞「ほうさい甲子園」表彰式・発表会 防災力強化県民運動ポスターコンクール表彰式



石原ゼミが「ほうさい甲子園」で大賞受賞 2016年度から小学校で出前授業

学校や地域での優れた防災教育等を顕彰する2022年度の1.17防災未来賞「ほうさい甲子園」(主催:兵庫県等)で政策学部 石原凌河ゼミの防災教育プロジェクトメンバー(学生7名)が大学生部門の最優秀賞「ほうさい大賞」を受賞した。2016年度から土砂災害の可能性が高い徳島県阿南市の小学校で児童への防災教育出前授業を延べ25校以上で実施。家庭や地域への波及を意識したテーマや手法で継続的に取り組んできたことが高く評価された。



「日本・ウクライナ大学パスウェイズ」を活用 ウクライナの学生受け入れ支援(第二段階)

龍谷大学は2022年5月に学生交換協定校キーウ大学の学生1名を受け入れた第一段階に続き、2022年9月に第二段階としてウクライナ人道支援「日本・ウクライナ大学パスウェイズ」の枠組みを通じて、ロシアによるウクライナ侵攻で影響を受けている学生5名を受け入れた。5名は本学の留学生別科生として半年間日本語を学習。その後それぞれの希望に合わせて学部や大学院への進学をサポートする他、学内外機関と連携した自立支援をおこなう。



学生による「規格外野菜」を使ったランチ提供 フードロス問題を感じてもらうきっかけに

フードロス問題に向き合う学生たちが、学生団体NiChiBle(ニチブル)を立ち上げ、農業生産者や本学卒業生の飲食業経営者から情報やアドバイスを受け「規格外野菜」をふんだんに使った「京野菜のラタトゥイユ丼」などのランチメニューをキャンパス内キッチンカーで調理販売するという本学初の取り組みを2022年12月に実施した。



ReTAction 掲載記事
<https://retaction-ryukoku.com/1528>



ものづくり中小企業 × 先端理工学部 自主的な調査・研究活動を通して 中小企業と交流

龍谷大学と滋賀県中小企業団体中央会は2014年に「産学地域連携基本協定」を締結し毎年連携事業を実施している。2022年10月、瀬田キャンパスで「ものづくり中小企業 × 先端理工学部連携交流事業 Vol.2」を開催。先端理工学部生の主体的活動「プロジェクトリサーチ」のポスターセッションを企業の視点で評価し、後日審査に基づく表彰式を開催した。就業事例紹介や中小企業の魅力紹介も発信。企業との交流で学生の新たな気づきを促した。



豊かな自然が残る茶葉の風景を守りたい 「政所茶ハーブブレンド」を商品化

2021年大学コンソーシアム京都で理事長賞を受賞した政策学部深尾ゼミの政所プロジェクトは後輩に継承され、2022年度は3年生5名が、滋賀県東近江市奥永源寺地域で生産される政所茶(まんどころちゃ)の茶畑に通い、農家や関係方面の方々で連携して「政所茶ハーブブレンド」を商品化。東近江と草津のマルシェで販売した。室町時代から600年にわたり在来種を無農薬栽培し手摘みで収穫する茶農家と原風景が広がる地域の存続危機に取り組んだ。



継続的な里山整備活動をおこなう 「森の風音」 緑の都市賞の「国土交通大臣賞」を受賞

2022年10月、緑の保全・創出活動に成果を上げている市民活動団体等を顕彰する「第42回緑の都市賞」(主催:公益財団法人都市緑化機構)の緑の市民協働部門で、社会学部の金子龍太郎教授が代表を務める任意団体「森の風音」が「国土交通大臣賞」を受賞した。学生や住民有志とともに2001年から「びわこ文化公園」で里山作業や草花・樹木の育成活動を通じ、高齢者の健康福祉と子どもたちの野外保育の場を整備拡充している点が高く評価された。



AI研究のソフトとハードを活用 ロボカップ世界大会、Japan Openで入賞

先端理工学部 電子情報通信課程 植村渉准教授の研究室チーム「BabyTigers-R」が「RoboCup2022世界大会 ロジスティクスリーグ」テクニカルチャレンジで準優勝、「RoboCup Japan Open2022 ロジスティクスリーグ」で3年連続優勝した。また、参加するだけでなく初めて「ロジスティクスリーグ」をジャパンオープンとして2020年に国内招致。瀬田キャンパスでオンライン開催での大会運営に貢献するなど積極的にサポートしている。



バレーボール女子日本代表 福留慧美選手 世界大会への初参戦を凱旋報告

2022年9月から10月にオランダとポーランドで開催された「2022世界バレー女子大会」へ日本代表「火の鳥NIPPON」の一員として初出場した福留慧美選手(デンソーエアリービーズ所属、2020年経済学部卒)が、10月に本学を訪れ、入澤崇学長と西日本インカレで優勝した女子バレーボール部に大会結果を報告した。入澤学長は「一歩一歩着実に努力を積み重ねられた結果、現在の活躍に繋がっている」と健闘を称えた。

学部長・研究科長の就任について

次期学部長等を選出しましたのでお知らせします。

今回新たに選出された学部長等は(新規)、
再任された学部長等は(継続)と表記しております。
(任期:2023.4.1~2025.3.31)

文学学部長(継続) 玉木 興慈(たまき こうじ)

経営学部長(継続) 長谷川 岳史(はせがわ たけし)

社会学学部長(継続) 井上 辰樹(いのうえ たつき)

政策学学部長(新規) 村田 和代(むらた かずよ)

農学部学部長(新規) 竹蔵 一紀(たけしと かずき)

先端理工学学部長(新規) 岸本 直之(きしもと なおゆき)

短期大学学部長(新規) 黒川 雅代子(くろかわ まよこ)

文学研究科長(継続) 國下 多美樹(くにした たみき)

社会学研究科長(新規) 栗田 修司(くりた しゅうじ)

理工学研究科長(新規) 岸本 直之(きしもと なおゆき)

実践真宗学研究科長(継続) 那須 英勝(なす えいしょう)

政策学研究科長(継続) 中森 孝文(なかもり たかふみ)

農学研究科長(継続) 島 純(しま じゅん)

09 Book Café 新刊紹介

*大学から出版助成を受けた新刊情報



龍谷叢書58
『宗教者は病院で何ができるのか*』
—非信者へのケアの諸相—
森田 敬史(文学部教授)・
打本 弘祐(農学部准教授)編著
勁草書房/2,970円(税込)



龍谷叢書59
『近代本願寺絵図と観光地京都*』
—親鸞生誕八百五十年・立教開宗八百年記念出版—
中西 直樹(文学部教授)著
三人社/4,180円(税込)



栄養科学ファウンデーションシリーズ 4
『生化学・基礎栄養学 第3版』
石原 健吾(農学部教授)編著
朝倉書店/2,970円(税込)



『スクールカウンセラーという仕事』
内田 利広(文学部教授)共著
青弓社/1,980円(税込)



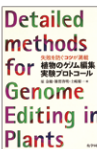
『攻撃的なクライアントへの対応』
—対人援助職の安全対策ガイド—
清水 隆則(龍谷大学名誉教授)監訳
栗田 修司(社会学部教授)・
樽井 康彦(社会学部准教授)訳
明石書店/3,520円(税込)



『レジリエンスから考えるこれからの
コミュニケーション教育』
村田 和代(政策学部教授)編
ジュリアン・チャプル(国際学部教授)著
ひつじ書房/3,190円(税込)



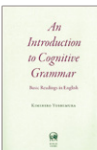
『昭和天皇拝謁記(6巻)』
—初代宮内庁長官田島道治の記録—
瀬畑 源(法学部准教授)編
岩波書店/3,520円(税込)
7巻 2023年5月以降刊行予定



『植物のゲノム編集 実験プロトコール』
土岐 精一(農学部教授)共編
化学同人/6,600円(税込)



シリーズ〈理論物理の探究〉1
『重力波・振動論』
中野 寛之(法学部教授)共著
朝倉書店/4,290円(税込)



『An Introduction to Cognitive Grammar — Basic Readings in English—』
吉村 公宏(文学部教授)著
ひつじ書房/1,760円(税込)



My Campus

10

My Campus

マイキャンパス

タイトル「大宮発、18時の夜へ」

Tさん 2022年10月撮影(大宮キャンパス)

「My Campus」ページでは、時代の流れとともに変わりゆく龍谷大学の「今」を感じていただけるキャンパス風景写真を、読者の皆さまから募り紹介しています。キャンパスの素敵な瞬間を是非写真に収めてご応募ください。

応募写真の中から厳選の上、次号の本ページを飾らせていただきます。

応募締切

2023年6月30日(金)

募集内容

龍谷大学のキャンパスを撮影した写真
(本学と関連のある場所・施設等)

応募方法

以下のフォームからご応募ください。

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/mycampus/>



注意事項

- ・2023年3月以降に本人が撮影した写真に限ります。
- ・1点につき10MB以内のjpgファイル。
- ・誌面の都合上、掲載は横サイズのトリミングとなります。撮影の際にはご注意ください。
- ・組写真、合成写真、過度の画像補正など実像に反する写真は不可。
- ・著作権・肖像権の侵害には十分に注意してください。
- ・応募に係る個人情報は本事業以外には利用しません。
- ・応募写真につきましては、龍谷大学が広報活動のために自由に利用できる権利を許諾していただきます。

応募写真は以下から閲覧していただけます。

龍谷大学の「今」を是非ご覧ください。

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/mycampus/>



広報誌「龍谷」

トルコ・シリア大地震で被災された方々への支援に向けてキャンパス内に募金箱を設置

2月6日未明に発生したトルコ・シリアでの大規模な地震は、多くの死傷者や被災者をもたらしました。

龍谷大学は、「浄土真宗の精神」を建学の精神とし、「すべてのいのちを大切に『平等』の心」を養うことを教育の目標の一つとして掲げています。

そこで本学では、国境や人種・宗教の違いを超えてすべての人々に支援の手が届き、被災された方々のいのちが守られ、一日も早く安心した生活を取り戻せるよう、学内各所に募金箱を設置しました。

皆さまのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。



設置場所

【深草キャンパス】

- ・紫英館守衛所前
- ・グローバル教育推進センター事務部内 (和顔館1階)
- ・ボランティア・NPO活動センター事務部内 (成就館1階)

【大宮キャンパス】

- ・文学部教務課内 (西覺1階)

【瀬田キャンパス】

- ・ボランティア・NPO活動センター事務部内 (青志館横)

設置期間

2月16日から4月30日まで

問い合わせ先

グローバル教育推進センター事務部

E-Mail : r-globe@ad.ryukoku.ac.jp

「龍谷大学の歴史」紹介動画

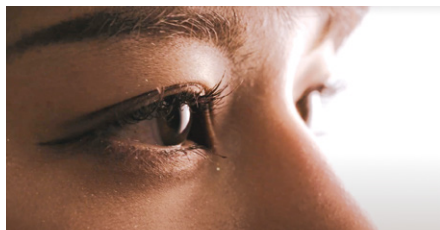
急速に変化する時代の中、様々な困難に直面するも「進取の精神」を絶やすことなく地域や社会の発展に力を尽くしてきました。

本動画では、長い歴史を通じて本学に所蔵されている重要な文化財なども紹介しています。

積み重ねた歴史を大切にしながら、少し先の未来2039年に迎える「創立400周年」への想いを込めた内容となっています。



<https://www.youtube.com/watch?v=F3l3pzRMuA8>



「Ryukoku-Action 2022」

構想400のアクションを訴求することを目的として、「Ryukoku-Action 2022」の動画を制作いたしました。

仕入れから提供まで学生自らがおこない地域社会に新たな繋がりを生んでいる「café rita」、アグリDX人材の育成、学生気候会議の開催、環境保護の新たな手法「環境DNA分析」、犯罪学研究センターの取り組みなど、本学の特徴的な教育・研究・社会貢献を映像で紹介しています。



<https://www.youtube.com/watch?v=dQy1LQJmCXA>



広報誌「龍谷」95号読者アンケート&プレゼントのご案内

今後の広報誌づくりのため、皆さまのご意見をお聞かせください。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選でご希望の読者プレゼントが当たります。お寄せいただいた感想・近況は「読者のひろば」に掲載させていただくことがあります。当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。



締切 2023年6月30日(金)

Web応募フォーム <https://www.ryukoku.ac.jp/enquete/>

読者プレゼント



龍谷ミュージアム ペア招待券…10組20名様



経営学部藤岡ゼミ×(株)マンドリル
レトルトカレー「ぶどう山椒をかけて食べるカレー」…5名様
※3種類の中からいずれか1種類をお届け。

ハガキでご応募の方は、ご希望のプレゼント名を明記した上で、住所・氏名・年齢・職業・電話番号（龍谷大学卒業生は卒業年度・学部）および広報誌「龍谷」の感想・意見、近況などを書き添えてご応募ください。

※いただいた個人情報は広報誌「龍谷」の編集以外の目的には使用いたしません。

読者アンケートのあて先

龍谷大学 学長室(広報)
〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
電話 075 (645) 7882 FAX 075 (645) 8692
E-mail: kouhou@ad.ryukoku.ac.jp

読者のひろば

自分の子どもの通う大学の様子を知りたいので楽しみにしています。

(在学生保護者 M さん)

在学生・卒業生の活躍に、毎号刺激を受けています。
(卒業生 N さん)

広報誌「龍谷」のデジタル版配信について

広報誌「龍谷」はデジタル版でも閲覧いただけます。冊子版の送付を希望されない方は、下記URLまたはQRコードからメールマガジン登録をお申し込みください。ご登録いただいたメールアドレスにデジタル版発行のご案内をお届けします。

広報誌「龍谷」デジタル版配信(メールマガジン登録)

<https://www.ryukoku.ac.jp/prdigital/>



広報誌「龍谷」デジタルライブラリー
(過去の広報誌もご覧いただけます)

<https://www.ryukoku.ac.jp/about/pr/publications/>



編集委員：井上 辰樹、木村 陸、野呂 靖
事務局：田中 雅子、谷 穂乃美

広報誌「龍谷」95号
2023年3月16日発行
編集：広報誌「龍谷」編集委員会
制作：龍谷大学 学長室(広報)
発行：龍谷大学

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
電話 075 (642) 1111(代表)
龍谷大学ホームページURL
<https://www.ryukoku.ac.jp/>





公式 Twitter 「龍谷大学広報」

twitter.com/ryukoku_univ_pr



公式 Instagram 「龍谷大学」

www.instagram.com/ryukokuuniversity



公式 Facebook 「龍谷大学」

www.facebook.com/RyukokuUniversity/



公式 YouTube 「龍谷大学」

www.youtube.com/user/RyukokuUniversity



**RYUKOKU
UNIVERSITY**